F. シラーの藝術論について

中村 美智太郎（一橋大学大学院・博士課程）

フリードリヒ・フォン・シラーは、劇作家として著名であり、また文学史においてゲーテと並ぶ偉大な詩人としてもよく知られている存在であるが、とりわけ美学史において思想家としての側面も同じくらい重要であるとみなされている。本発表では後者の側面に着目し、シラーの藝術をめぐる思想全体に通底している「主体形成」の特徴について論じる。

先行研究では、シラーが 1791 年から数年間にわたりカントの『判断力批判』を中心に集中的に研究し、その思想を受容したとされている。また、シラー自身も 1794 年 3 月 3 日のケルナー宛ての書簡のなかで、自らカント研究に没頭していることを吐露している。このように、シラーの思想にはカント研究の成果が盛り込まれていると考えることができる。この観点から、シラーの議論をカントの議論と関連づけて論じることがまず必要である。

このカントとの関連を前提として、シラーの主体形成をめぐる議論のなかで美的革命の精神が一定の役割を果たしていることに着目する。「美的革命」（ästhetische Revolution）とは、F. シュレーゲルが提唱した理念であるが、例えば、シラーの「美的国家」（ästhetische Staat）概念に、この美的革命の精神を読み取ることができる。この美的国家とは、政治的制度としての国家ではなく、趣味によって個人のうちに作り出される調和が社会においても実現されることを示していると解釈できる。例えばイェシュケは、美的革命について、政治や詩などの「別々の領域への生の分裂を止揚し、失われていると考えられた統一を取り戻そうとする」点を指摘しているが、この指摘に従うなら、分裂を止揚し、新しい世界への統一をめざす運動はシラーの美的国家概念のうちにも含まれているとみなすことができる。シラーにおいて、この美的革命の主体として重視されるのは「情感詩人」である。この情感詩人のあり方を、とりわけシェリングの藝術をめぐる議論のなかから天才をめぐる議論を取り上げ、その天才論との比較を通じて、際立たせることを試みる。

思想的な影響関係を考慮に入れながら、シラーの思想とそれを取り巻く議論の考察を通じて、シラーの藝術をめぐる議論の目指すものを提示したいと考えている。